

## 「繕い裁つ人」★★★★

2014（平成26）年11月12日鑑賞

鑑賞＜GAGA試写室＞

監督：三島有紀子

原作：池辺葵『繕い裁つ人』（講談社『ハツキス』連載）

南市江（仕立て屋「南洋裁店」の女主人）／中谷美紀

藤井（百貨店の服飾担当の営業マン）／三浦貴大

牧葵（雑貨店「ナイフ」の店主）／片桐はいり

葉子（藤井の妹）／黒木華

広江（市江の母）／余貴美子

ゆき（高校生）／杉咲花

まり（中田老人の孫）／

高校時代の恩師（南洋裁店の古い客）／中尾ミエ

百貨店に入っているテーラー（先代の友人）／伊武雅刀

中田老人（「南洋裁店」の古い客）／

2015年・日本映画・104分

配給／ギャガ

### ＜三島有紀子監督の映画をはじめて鑑賞＞

最近の邦画はレベルの低さが目につくため、私はその鑑賞意欲が薄れている。しかし1969年生まれ、大阪府出身の三島有紀子監督の名前は、『しあわせのパン』（12年）『ぶどうのなみだ』（14年）でしっかりインプットしていた。とくに『ぶどうのなみだ』は第38回モントリオール世界映画祭に特別招待された作品だと聞き注目していたが、結果は残念ながら（予想通り？）入賞はなし。そんなこともあって、結局これまで彼女の監督作品は2本とも観ていなかったが、本作は中谷美紀主演と聞き、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』での彼女の毅然とした演技が目にと焼き付いている私は、「こりゃ必見！」と思って試写室へ。

40歳近くになった中谷美紀の往年の美貌は衰えているかもしれないが、2014年10月23日～31日に開催された第27回東京国際映画祭では、映画祭の「顔」である“フェスティバル・ミュージズ”に抜擢されたほどだから、今の邦画界では彼女の存在感は際立っている。「職人三部作」のラストとなる本作で、中谷美紀演じる南洋裁店の2代目・市江は、母親の広江（余貴美子）と共に坂の上にある一軒家に住んで仕事をしているが、まずは、映画冒頭に映し出されるその「職場」の美しさに注目！

### ＜市江の徹底した職人ぶりに注目！＞

今、市江の服をブランド化するという企画に夢中になっているのが、百貨店の若い営業マンの藤井（三浦貴大）。市江のワンピースの写真に目を留めた上司から「素敵ね。きっとご本人も素敵なんだろうね」と言われたのに対して、藤井は「いやぁ・・・頑固じいって感じですよ」と説明するほどだから、市江の職人ぶりは徹底しているようだ。しかし、なぜ藤井がそんな「頑固じい」の作る洋服に興味と関心を・・・？

三島監督はプレスシートの「DIRECTOR INTERVIEW」の中で「洋服に限らず、すべてのモノやコトに関して言えることですが、何かを選ぶとき、なんとなくとか、とりあえず必要だったから、という選択はわたしの中にはなく、“これが好き”と選んだものをずっと大事にしたい——そういう思いがあります」と述べている。さらに、「それは、わたしの父親が神戸のテーラーでスーツを作っていたことも影響しています。父は、季節ごとのスーツは数着とタキシード1着、それをずっと大事に着ていました。技術を持っている職人がひとつひとつ丁寧にひとつのものを仕上げ、それをわたしたちが身に纏う。そういう姿をずっと見て育ってきたので、いつかテーラーという職人の生き方を映画で撮りたいと企画書を持って回っていたんです」と述べている。

映画監督は「職人」の最たるものだから、彼女が父親から受けたそんな影響は本作の演出に大きく役立っているはずだ。しかし本作では、全編を通じた市江の徹底した職人ぶりに注目！

### ＜守旧？それともイノベーション？＞

石原裕次郎と共に「歌う映画スター」の代表だった鶴田浩二が歌った『傷だらけの人生』（70年）では、「こんなことを申し上げる私もやっぱり古い人間でござんしょうかね」というセリフが印象的だ。しかし、私がそこで見逃してはならないと思うのは、「古い奴だと思いでしょ、古い奴こそ新しいものを欲しがるもんでございます」というセリフ。つまり、古いものや古い価値観を大切にすることも大切だが、同時に新しいものを欲しがる、今風の言葉で言えばイノベーションも大切ということだ。

市江の服をブランド化するという藤井の企画に市江が全く興味を示さないのは、市江の服を唯一扱っている「ナイフ」の店主・牧葵（片桐はいり）が言うように、市江は「少しの新作と、先代の服の仕立て直しと、サイズ直し以外に仕事を広げたくない」ためだ。しかし、ホントにそれでいいの？

### ＜市江の主張・生き方は明確だが、時代適合性は？＞

藤井が広江の出してくれる饅頭をパクパク食べながら、しつこく店の中をウォッチングしていると、市江を訪れてくる客は①母親のワンピースを自分用に直ししてほしいという高校生のゆき（杉咲花）、②幼い娘に破かれた服をもって来た日野、など近所の馴染みの人たちばかりだ。さらに、③中田老人が持ってきたスーツを懇切丁寧にサイズ直しする姿、④高校時代の恩師（中尾ミエ）からの「亡き夫と初めて会った時に着た服で死に装束を作ってくれ」という難題に徹夜で挑む市江の姿、を見てみると、そのこだわりぶりはたしかにすごい。これらの服は、いずれも市江の亡き祖母で先代の志乃がオーダーメイドで作った服で、市江が取り出したデザインブックには、顧客のサイズや情報が細かく記されていた。

このように、古きを守ろうとする市江の姿勢を「挑戦や変化を恐れているだけではないか」と批判する藤井に対する市江の返事は、「新しい服も先代のデザインを流用しているし、“一生着続けられる服”を作ろうとした先代の仕事を全うしたい」というものだ。しかし、私に言わせれば、これは少し古いものの価値に偏り過ぎており、イノベーションの気概に欠けているのでは・・・？

### ＜良い物を長く？それともスクラップアンドビルド？＞

まちづくり法や不動産法をライフワークとしてきた私は、西欧諸国に比べるとビルを含む日本の建物がスクラップアンドビルド方式になっていると批判されていることをよく知っている。たしかに、西欧のお城を含む石造りの建物に比べると、日本の建物がチャチで安っぽく見えるのはまちがいない。その反省の上に、たとえば「200年住宅」なども生まれてきた。

しかし、他方で建築技術が進歩して画一化され、現場ではなく工場で大量生産される時代になると、必ずしもスクラップアンドビルドが悪いとは言えなくなってくる。とりわけ、台所、トイレなど水回りの「内装」はすべてユニット方式になってくるから、古くなれば「取り替え」が主流となり、修繕には多額の費用がかかることになる。車や電化製品などもすべてそう。つまり、故障したり老朽化すれば新品に買い換えた方が安いし、その方がより性能の良い商品を手に入れるわけだ。ケータイなどIT製品は特にそうで、今ドキ数年前のガラケーを持っているのは私くらいのもの・・・？

### ＜良い物の価値はわかるが、修繕のお値段は？＞

それと同じで、服だって、今やユニクロを代表とする「安く！大量に！」という方式が主流。バブルの時代に1着何十万円もしたカシミアのコートも、今は洋服タンスの奥に眠っているだけで、日々使うのは軽くて暖かく格安なユニクロのダウンジャケットになっている。さらに、団塊世代の私はケチだからなかなか捨てられないが、アラフォー世代や若い世代は飽きたらすぐに捨てるのが常識かつ美德となっている。

本作は、特にそういう風潮に警鐘を鳴らしたわけではなく、市江の職人としての生き方や世界観をあらためて問い直そうとただけだが、三島監督がそういう価値観を持っていることは当然。それはそれでいいのだが、私が思うのは、それならスクリーン上でみる市江の一つ一つの洋服に対する丹精込めた（修繕）作業の対価、つまり修繕費用がいくらなのかを示してくれなければ、合理的な判断ができないのではないということだ。たしかに1着の服に愛着を持ち長く着るのは素晴らしいことだが、市江が中田老人のスーツのサイズ直しや、母親用のワンピースの娘用への仕立て直し等について請求する費用は、HOW MUCH・・・？

### ＜本作のロケ地に注目！神戸の人は必見！＞

本作冒頭みる、正面の窓から光が差し込む窓辺でミシンに向かう市江のシーンは、光と影のコントラストと中谷美紀の後ろ姿の演技がポイント。また、続く坂のシーンではカメラワークがポイントだ。本作はギャガの配給だが、神戸を中心に撮影しているため、神戸在住の人は割引料金で鑑賞できる等の特典を設けているそう。もちろん、アジア映画のミュージズ・杉野希妃の『欲動（TAKSU）』（14年）のように、製作当初から海外での上映を前提としてインターナショナルタイトルを設定したり、バリ島の音楽や舞踏を意識的に取り入れたりの「外向き志向」も大切だが、三島監督は本作を徹底的に「内向き志向」で撮っている。

したがって、南洋裁店のロケセットとされた兵庫県川西市にある歴史的建造物の旧平賀邸はもとより、牧葵の雑貨店は神戸市東灘区にある「NAIFS（ナイフ）」や、市江が気分転換に通い、いつも食べている大きなチーズケーキを出してくれる神戸市中央区の珈琲店サンパウロは、すべて実在するお店だから地元の人はよく知っているのでは？また、先代の友人（伊武雅刀）のテーラーの店が入っている大丸百貨店は、1995年1月17日の阪神・淡路大震災で被害を受けた建物だが、これは私もよく知っている建物だ。さらに、後半のストーリーのハイライトとなる「夜会」の会場は神戸どうぶつ王国（旧神戸花鳥園）、ラストに向けて登場する車椅子に乗った藤井の妹・葉子（黒木華）が結婚式を挙げるのは旧グッゲンハイム邸だ。さらに、藤井と市江が偶然鉢合わせになる図書館で、何冊もの服飾関係の本を抱えていた藤井は、市江の「そんなにあつたら、本当に好きなものが、わからなくなるんじゃないかしら」という言葉に胸を衝かれたが、その図書館は何と三島監督の母校である神戸女学院の図書館だ。

このように、本作はトコトン神戸のまちにこだわった「内向き志向」で作られているので、これらのロケ地に注目！神戸の人は必見だ！

### ＜本作の焦点は？＞

導入部からのゆったりした進行を観ていると、本作の焦点は、市江は今のスタンスを守り抜くのか、それとも藤井が盛んに勧めるように、オリジナルデザインの服を作るという次のステップに踏み出すのか、という点にあることがわかる。しかし、私でも少しイライラするほど、市江のスタンスは変わらない。そんな市江の姿を見て、藤井は黙って東京に行き、別の業界に転身（？）してしまっただけだ。さらに、後半のハイライトとなる「夜会」の華やかさや素晴らしいさをみていると、結局永久に市江のスタンスは変わらないのでは、と思えてくる。

そんな市江に少しが変化が見え始めたのは、偶然（といってもこの偶然はかなり変だが・・・）車椅子に乗った藤井の妹・葉子と出会い、互いの世界観をぶつけ合ったところからだ。藤井はおしゃべりな方ではないから、かなり変な行動を取っている藤井が何を考えているのか、市江はわかっていなかったはず。しかし、服に向けた藤井の熱い思いを、藤井に代わって語る葉子の言葉を聞いていると、市江の気持ちに少しづつ変化が・・・。

### ＜結論はあまい？余白がいっぱい？＞

市江の気持ちに影響を与えたもう一つは「夜会」に興味を示した、中田老人の孫のまりたち3人の女子高生の動き。「夜会」で見た、見違えるような祖父の姿に感動したまりは、市江に自分たちのドレスを作ってほしいと頼んだが、中田老人は「服の価値が分からない者はダメだ」とたしなめ、先代と市江の仕事を褒め称えた。今ドキの若いモンが、こんなじいさんの言葉をどう受け止めるのかは実社会では全くわからないが、さて本作では・・・？そして、そんなまりたちの熱い思いを聞いたことによって、さて、市江のスタンスや世界観の変換はあるの？

プレスシートには、本作の原作者・池辺葵のコメントがあり、そこには「ストーリーはどこか曖昧で 強さ 弱さ 葛藤や滑稽さ 不安定さや不完全さがあって 感じ方を見る側に委ねてくれている余白を感じました」と書かれている。さて、大きく変化したかのように見える市江のスタンスを、あなたはどうか受け止める？しかし、本作の結論はあまい？そして、余白がいっぱい？